『キャラ人気投票戦争』

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『キャラ人気投票戦争』

【Ｎコード】
Ｎ４００２Ｐ

【作者名】
統合失調症無職青年

【あらすじ】
キャラ人気投票で同点一位に選ばれた、近藤春雄、河村英樹、瀬羽大輔の三人は、人気者三ニートの会と称して、談笑に講じていた。そこへ、予期せぬ闖入者たちが現れる。そう、人気投票でまさかの一票も入れてもらえなかった、その他大勢のキャラたちが文句を言いに集まってきたのだ。
ふとしたことから争いは始まり、人気者三ニートは逃亡者へと姿を変える。この戦いに終わりは訪れるのか。

テレビアニメ「銀魂」人気投票編をぱくってお送りする、おふざけ小説。

第一章　人気者三ニートの会

まっ白い空間に、円卓を囲んだ三人の男たち。そのうちのひとり、黒のスーツと黒のネクタイ、無地の白いワイシャツできめた男が、重々しく口を開いた。

「諸君に集まってもらったのは、他でもない。これは我々が栄えあるキャラ人気投票において、それぞれ一票を頂戴したことを祝う祝賀会である。僭越ながら、この余が司会を務めさせていただくことと相成った。これより、人気者三ニートの会を開催する」

「そんなことより、ここはどこだよ？」

仮面をつけた腹が突き出た男が「余」と名乗る男に訊ねた。少しばかり怒気をはらんだ口調であった。

「ここは余が拵えた、特別会場だ」

「真白なのである。これが谷垣、お前の趣味なのか？」

黒縁眼鏡の男が聞いた。

「純白の空間だからこそ、我々の存在が際立つというもの。そうではないかな、諸君？」

今度は谷垣――――世界ニート帝国皇帝、瀬羽大輔が二人に問うた。

「そういうもんか」

仮面の男――――ニート、ゼロこと河村英樹は納得していないようだった。

「そういうものなのだ。さあさあ、我々の人気を祝おうではないか」

「そう言われても、何もないではないか」

黒縁眼鏡――――ニート、近藤春雄が周囲を見渡して言った。

「確かに。これは失礼した。そら」

瀬羽が手を叩くと、ペットボトルが三つ現れた。

「おい今の、どうやったんだ？」

河村が不審顔で聞く。

「作者、創造者特権を行使したまで。この世界では、余に敵う者など、存在しない。すべては余の思いのままだ。はははははは」

「おい谷垣、春雄はアクエリアスが飲みたいのである。これはなんだ、ウーロン茶ではないか。早急に交換しろなのである」

近藤が文句を垂れた。

「余は谷垣ではない、瀬羽大輔だ。余のことは陛下と呼ぶように」

「断るのである。誰がお前など、認めるものか」

近藤が腕を組み、頬を膨らませた。怒っているようだ。

「なにそれ春雄さん、それかわいいかも」

河村がぷっと噴き出した。

「春雄は真面目に怒っているのである。ゼロ、何がおかしい？　春雄はぷんぷんなのである」

「だってさ。そういうのは、小さい子供がすることなんじゃねえの？　春雄さんって何歳だっけ？」

「二十三歳なのである。ゼロは？」

「俺のことはまあいいじゃねえか」

「余は永遠の二十代である」

瀬羽が二人の会話に口を挟んできた。

「お前には聞いていないのである」

「そうだよ、何勝手に人の会話に割り込んで来てんだよ」

瀬羽は一気に二人から批判される羽目となった。

「二人とも、随分とつれないではないか。余は仮にも作者、創造者なのだぞ？　余がいなければ、二人はこの世に生を受けることはできなかったというのに。随分な言い草ではないか」

「ところでさあ、お前、前は自分のこと『朕』って言ってなかった

か？」

「うむ。春雄はそれは記憶しているのである」

「ああ、あれか。あれはなんか日本の右翼とかに怒られそうだから、使うのやめにした。余も面倒事に巻き込まれるのは、ごめんだからな」

「ただのへたれだろ、お前」

河村があきれ顔で言った。

「へたれなどではない、余は常識的良識的で慎重な態度を選択したに過ぎぬ。勘違いせぬように」

「いや、どう言い繕っても、谷垣がへたれなのは、明明白白なのである。この春雄とゼロの目を、誤魔化すことはできないのである。覚悟しろなのである」

「何をどう覚悟すればいいのか、具体的にご教授願いたいものだ、近藤春雄」

瀬羽は冷笑を浮かべ、近藤を見やった。

「具体的にはこういうことなのである！」

突然、近藤がペットボトルを瀬羽に投げつけた。しかし、瀬羽は難なくペットボトルを手で掴んだ。

「無礼な。これが神に対する行いか」

瀬羽がふんと鼻で笑う。

「早く、アクエリアスに交換しろなのである。さもないと、春雄の怒りは怒髪天に衝くことになるぞ？」

近藤は瀬羽を鋭く睨みつけた。

「そうだそうだ、ついでに俺のもポカリに交換しろ。さもいないと、俺のこの腰の剣を引き抜くことになるぜ？」

河村も瀬羽にペットボトルを投げてよこした。これも瀬羽は受け止めた。

「やれやれ。ウーロン茶は人気がないものだな」

瀬羽は大げさに肩をすくめて見せた。

「いいから、とっとと交換しろっての」

「わかった。交換しよう」

瀬羽は二本のペットボトルの上に手をかざした。すると、瞬く間にウーロン茶がアクエリアスとポカリに様変わりした。ほんの一瞬の出来事であった。

第二章　「そもそも俺たちって・・・・・・」

「ほら、ポカリだ」

瀬羽が河村にペットボトルを投げ渡す。

「おう。だが、礼は言わないぜ」

河村がしかと受け取った。

「ほら、アクエリアスだ」

瀬羽が今度は近藤にペットボトルを投げた。

「うむ。春雄は礼は言わないのである。この程度のことは、春雄レベルの人間に対する款待として、至極当然なのである」

近藤は素早くキャップをあけ、アクエリアスで喉を潤した。

「さて、そろそろ本題に入りたい」

瀬羽が改まって言った。

「本題てなんだよ」

河村がポカリを飲みながら聞く。

「むろん、人気者三ニートの三者会談だ」

瀬羽が何を言っているのかという表情で答えた。

「うむ。早いところ始めるのである」

近藤が瀬羽の背中を押した。

「ちよっと待てよ」

河村が待ったをかけた。

「どうした、ゼロ？」

「河村、何か異論でもあるのか？」

瀬羽と近藤が同時に河村を見つめた。

「自分で言うのも何だが、そもそも俺たちって・・・・・・」

河村がもったいぶったように区切って言う。

「そもそも俺たちが何なのだ？　続きを話すのだ、ゼロ」

近藤が河村をせかす。

「言っちゃっていいのか？」

河村は困惑気味であった。

「いいのである。この春雄が許可するのである。早く言うのである」

「余も認めよう。というか、話の途中で話を勝手に終える奴を余は許さん。そういう奴は許せん。本当に許せん。はっきり言っていらつく。もうたまらなくいらいらしてくる。河村、そういうわけだから、余が怒らないうちに、早く続きを言うことだな」

「じゃあ、言うぜ？　本当にいいのか？」

河村がごくりと生唾を飲み込んだ。よほど重大な話なのだろう。

「いいから話すのである、ゼロ。谷垣ではないが、春雄もなんかいらいらしてきたのである」

近藤は貧乏ゆすりを始めた。

「こういうのって、いらつくだろう、近藤よ。余もかなりいらついてきた。河村、今のうちに話せ。余も我慢の限界が近付いてきたかもしれん」

「俺の話聞いても、二人とも怒らないか？」

河村が不安げに二人に聞いてきた。

「聞くも何も、今のこの状態を何とかしてほしいのである。春雄のいら値もかなり上がってきたようなのである。聞かない方が怒り爆発しそうなのである」

「まったくだ。余のいら値も相当きているな。河村、五秒以内に続きを話すように。さもないと、余と近藤の逆鱗に触れることになるであろう」

「わかった。話すよ。なあ、そもそも俺たちって、人気者なのか？」

一瞬、その場が静寂に包まれた。

誰一人として、言葉を発しない時間が流れた。それは数十秒ほどであった。

「な、何を言い出すのか、ゼロよ。春雄たちは人気者に決まっているのである。なあ、そうだろう、谷垣」

近藤が同意を求めるように瀬羽を見つめた。

「と、当然だ。余たち三名は人気者三ニートに違いない。間違いはない。まったく、何を言い出すかと思えば、まったく、話にならんな」

近藤も瀬羽も動揺しているようだった。

「ほんとに人気者なのか。だって俺ら、一票しかもらってないんだぜ？」

またも三人の空間は静まり返った。

沈黙を破るように、河村が言う。

「俺は俺たち三人は、それほど人気者じゃないと思うんだ。なあ、そうは思わねえか？」

「だ、黙れ、河村。無礼であろう。余は誰が何と言おうと、一票をもらったことは、確実なのだ」

「そ、そうなのである、春雄とて、一票を確かにもらったのである。ゼロが何と言おうと、春雄は人気者なのである」

近藤は胸を張って言った。

「・・・・・・そうか。二人がそう言うなら、俺はもう何も言わねえよ。・・・・・・ところで、何で三票しか有効投票がなかったんだろうな？」

「それはもちろん、この男のせいなのである！」

近藤が躊躇なく、瀬羽を指差した。

「なんだ、どういう意味だ、近藤」

瀬羽が近藤を睨みつけた。

「この男、谷垣直人が逮捕歴があり、人格にかなりの問題があることから、読者の大半が人気投票に参加しなかったのである！　要はこの男は、嫌われ者なのである。この男のブログを見に来ている読者の大半はこの男が嫌いなのである！」

「まあ、そうだな」

河村が近藤に賛同した。

「もっといえば、一説によると、読者の大半はキャラの名前を覚えていないという説もあるのである！　それもこれも、この男が読者の記憶に残るような魅力的なキャラクターを作れなかったからなの

である！　すべてはこの男の責任なのである！」

「近藤、あまり人をしつこく何度も指差しのではないぞ」

瀬羽はあまりにしつこく指を差されたので、近藤に注意を促した。

第三章　闖入者

近藤は瀬羽の注意など、意に介さなかった。

「いや、春雄は黙らないのである！　なぜなら、春雄の指摘はすべて事実に基づく正義の指摘だからなのである！　谷垣、お前はもっと反省するべきなのである！」

「反省しろと言われてものう。余に何を具体的にどうしろと申すのだ？」

瀬羽は頭をかいている。

「まずその性格を直すのである！　まずは人格改造から始めるべきなのである！」

「人格改造、か。この年になると、それも厳しいのう。無理だのう」

「お前はやる気があるのか！？」

「やる気とは何のやる気のことだ？」

「お前のブログ、小説に対するやる気のことを言っているのである！　今のままでいいと本当に思っているのか？　答えろ、谷垣！」

「今は瀬羽大輔だ。それに陛下と敬称をつけとさっき言っただろう。もう忘れたのか？」

「そんなことはどうでもいいのである！」

「余にとってはどうでもよくないのだ。ところで、余は人気者三ニートの祝賀会を開催したつもりだったのだが、いつから余を批判する会に変わったのだ？　勝手は許さんぞ」

「その人気が怪しいし、人気が出ないのがお前のせいだから、春雄さんはブチ切れてんじゃねえか？　自称皇帝のくせに、そんなこともわかんねえのか？　勘弁してれよな」

河村が大げさにため息をつく。

「やはり、一票じゃダメかのう？　一票じゃ人気者って呼べないかのう？　どうだ？」

瀬羽が今更ながらに困った顔を浮かべた。

「かなり厳しいんじゃねえの？」

「ゼロ、厳しいどころではないのである！　もはや人気以前の問題なのである！　我々の存在価値・存在意義・存在理由そのものが問われているのである！」

「たった三票でも、ないよりましであろう？」

瀬羽が苦笑いをしながら言った。

「お前、それを言っちゃあおしまいだぜ？」

河村が苦虫をかみつぶした表情を見せた。

「き、貴様！　何と言うことを言うのだ！」

近藤が顔色を変えて怒鳴った。

「まあ、余は率直な意見を述べたまでだ。さらにはっきり言わせてもらうと、余には大した小説は書けないし、大した魅力的な登場人物を描き出す能力もない。余は三流・三文・駄作・ゴミ・クズ・クソ小説しか書けない人間なのだ。残念ながら、それが現実だ。まずはその現実を認めることから始めようではないか。どうだ？」

近藤は顔を真っ赤にさせた。

「谷垣、開き直ったな！」

「まあ、そうとも言うが、これは謙虚な態度だとほめてもらいたいと余自身は思っている」

「ゼロ、何を黙っているのだ！　ゼロもこの男を批判しろなのである！」

近藤は今度は河村に矛先を向けた。

「お、俺？　しょうがなくねえ。こいつはこういう奴なんだし、能力ないのは本当なんだから」

「ゼロはこの男をこのままにしておくと言うのか！？」

近藤の顔は驚きで大きく顔をゆがめていた。

「まあな。そういうこった」

「ガーン」

落胆した近藤は下を向いてしまった。

「まあそのなんだ、そろそろ祝賀会といこうではないか？　余の魔力でポカリ、アクエリ飲み放題だぞ？」

「なんかケチくせえなあ、おい。もっとなんかいいもの食わせろよ」

河村が瀬羽に文句を言ってきた。

「ならば、オーダーしてくれたまえ。注文があれば、余が魔力で出してやろう」

「おし。それなら、俺は何にするかなあ」

そのとき、ようやく始まろうとした祝賀会をぶち壊す声が轟いた。

「おうおう、皆さん、お揃いで楽しそうじゃあないですかあ」

瀬羽と河村は声の主を見た。超美人ことニート、箕輪晴子であった。

「箕輪さん！？　いったいどうしてここがわかったんだ！」

「ちょっとね。とある人に教えてもらいましてね。それより、皆さんずるいんじゃないですかあ。いくら人気があると言っても、三人だけでお祝いするというのは。私や他の人も招待して然るべきじゃないかと私は思いますけとねえ。ねえ、近藤先輩？」

名を呼ばれた近藤ははっとして我に返った。

「み、箕輪君！？　ち、違うのである！　これは谷垣が勝手に無理やり開いたことで、春雄は関わり合いがないのである！」

近藤は首筋に冷や汗をかいていた。

「へえ。じゃあそういうことにしておきましょうかあ。じゃ、他の皆さんもここ呼んでも一切差し支えありませんよね？」

「他の皆だと？」

瀬羽が眉間に皺を寄せた。

「はーい、皆さーん、許可がおりましたよお」

箕輪の声を待っていたかのように、大勢の人間が続々と押し寄せてきた。

第四章　キャラ集合、政治家編

雪崩れこむ人々を見て、瀬羽は不快気に怒鳴った。

「なんだ貴様らは！　ここは余の居城だぞ！　土足で踏み込んでくるでない！　即刻立ち去るがいい！」

「冷たいじゃねえか、ガッキージュニア。俺たちはニート仲間だろ？」

ニート、セッキーこと関根哲夫がにやつきながら言う。

「何が仲間だ！　貴様の如きヘボニートと余とは、雲泥の差があるのだ！　雲泥の差が！　越えられない壁と言う奴がな！」

「直人、どうして父である私を呼んでくれなかったんだ？」

瀬羽大輔こと谷垣直人の父にして、民自党総裁の谷垣一禎が笑顔で瀬羽と向き合って言った。

「誰がお前など、呼ぶものか！　お前なんぞは、中国で女を買っていればいいのだ！　お前も去れ！　顔も見たくもない！」

瀬羽は青筋を立てて父親を怒鳴りつけた。

「ははは、ほんとは私が来て嬉しい筈なのに、この子ときたら」

谷垣一禎は満面の笑みを浮かべていた。

「お前が噂のガッキーのガキか。おい、ガッキーのガキ、俺ら民自党元首相組も歓迎してくれるんだろうなあ」

民自党衆議院議員、元首相の麻生太一郎が瀬羽に訊ねた。麻生は高級そうな葉巻を咥えていた。麻生の近くには、同じく民自党の元首相である森喜雄、小泉純雄、安倍晋次、福田康が立っていた。

「我々は当然ＶＩＰ待遇だな」

森が漏らす。

「当然ですね。なんせ、元総理ですから」

安倍もさも当然だとばかりに頷く。

「でも、私はあなたたちとは違うんです」

福田がひとり異を唱えたが、他の四人の元首相は無視した。

「元首相はあなたたちだけではありませんよ？」

頭の上に輪っかをつけた男が言った。元主民党衆議院議員で元首相の故・山鳩由紀夫である。

「おめえは死んだはずだろ。死人は黙ってろ。というか、おとなしくあの世で遊んでろ」

麻生が乱暴な口を利いた。

「おのれ、民自党！　麻生さん、あなたはこの私に衆院総選挙で敗

れた癖に、大きな顔をしてなんですか！　漢字も読めない馬鹿の癖して、生意気です！」

山鳩が猛然と反論する。

「そうだそうだ。世論の支持を得られなかった民自党元首相連中は帰れ！　帰れ！」

元主民党衆議院議員、元副総理の故・菅直仁が吠えた。こちらも頭の上にわっかがついている。他に輪っかがついた人間に、元主民党の故人である田福衣里子、青森愛、中田美絵子、小田和美、元主民党代表沢尾一郎、元総務相口原一博、元法相葉千景子、元郵政・金融担当大臣の井亀静香、元国土交通大臣原前誠司、元外務大臣田岡克也、元官房長官野平博文がいた。

「ちょっと皆さん、現職総理の私を置いてきぼりにしないで下さいよ」

現首相の仙石義人がぼやいた。

「あーやだやだ、ダメな二大政党制の連中がでしゃばりやがって。これからはたちあがるんだ日本の時代だよ。あんたらはお払い箱さ」

東京都知事の原石慎太郎が傲慢に言い放った。原石都知事の周辺には、長男の民自党衆議院議員・原石伸晃、二男のタレント・俳優の原石良純、三男の元民自党衆議院議員・原石宏高、四男の画家の原石延啓、俳優の知多ひろし、俳優の利綿哲也、元航空幕僚長・元空将の母田神俊雄、たちあがるんだ日本代表の沼平赳夫がいた。

「なんだ原石しんちゃんか。参院選でたったの一議席しかとれなか

った分際で、何しにきやがったんだ？　俺たちに笑われに来たのか？　へっ」

麻生が小馬鹿にしたように口をへの字にして笑った。

「麻生、貴様！」

原石が瞬間湯沸かし器のようにブチ切れた。

「都知事、こんなアメリカのポチの麻生に何を言っても無駄ですよ」

母田神が原石をなだめた。

「なんだと？　モタちゃん、今なんつった？　誰がアメリカのポチだって？　やんのか、こら？　あん？」

麻生が母田神に近づき、鋭い眼光で睨みつけた。

「麻生さん、あなたたち民自党も所詮主民党と同じ穴の狢です。民自党はアメリカ派、主民党は中国派です。そして、真にこの国を憂うる政党こそが、たちあがるんだ日本なのです」

母田神が麻生をにらみ返して言った。

「ほう。へえ。立ち枯れ日本が、偉そうに」

「ほほう。保守同士の内ゲバですか。これは見ものですな」

山鳩がさも愉快そうに笑みをたたえている。

「兄よ。そんなに保守同士が争うのが楽しいのか」

無所属の衆議院議員で、山鳩由紀夫の弟の山鳩邦夫が苦渋の表情を浮かべていた。

「弟よ、いたのか。気がつかなかったよ。まるでお前の存在感の薄さを象徴しているかのようだな」

「兄よ、なんということを言うのだ。それが実の兄の言葉なのか」

「おいおいおい、なんか大勢来すぎて、わけわかんなくなってねえか？」

河村が不安げに瀬羽に呟いた。

「確かにな。予想外に人が多く集まり過ぎてはいるな」

「これを捌き切れるのか、谷垣」

だんだん顔が青くなってきた近藤が言う。

「ここまできたら、捌くしかないだろう」

瀬羽は面倒くさげに吐き捨てた。

第五章　井桜誠、吠える

「ちょっとちょっと都知事、僕のこと完全に忘れてませんか？」

元衆議院議員の村杉太蔵が原石の肩を叩く。

「おう、すまん、完全に忘れてた。がはははははははは」

原石が豪快に笑い飛ばした。

「ついでに太蔵の教育係の俺のことも忘れていませんかね、都知事」

元参院議員の仁大田厚が腕を組んで、原石を見つめていた。

「おお、あんたもおったのか。すまんすまん、これまた忘れてた」

「げ、仁大田さん、生きてたんですか？」

村杉が顔を青くしている。

「ああ、ピンピンしてるぜ。お前のせいで、鉄球でひどい目に遭ったがな。タイゾー、そのときの借り、今返してやろうか？」

仁大田の目が据わっていた。

「え、遠慮しておきますよ」

村杉はなるべく仁大田と目を合わせないようにしていた。

「麻生さん、母田神閣下を更迭したことに、強く抗議します！」

突如として、べっ甲眼鏡をかけた肥満体の男が、麻生に向ってマイクで言った。保守系市民団体「在日特権を許すまじ市民の会」会長の井桜誠であった。

「なんだおめえは？　ナニモンだ？」

麻生が険悪な表情で睨みつけた。

「真にこの国を憂うる、憂国の士、愛国者の井桜誠と申します！」

「知らねえなあ。一般人が気安く俺に話しかけるなよ。俺は華族の出で、元首相なんだ。そこんところをよくわきまえてくれ、自称国士様」

「麻生さん、あなたは八月十五日に靖国神社を公式参拝するべきでした。それなのに、中韓に要らぬ配慮をして、なさらなかった。許されざる弱腰外交です！　強く抗議します！　許しません！　麻生太一郎は、弱腰を国民に向って謝罪しろー！」

井桜は鼻息が激しかった。

「外交の麻生と呼ばれた俺様に抗議するたあ、あんた何様だよ」

麻生は呆れ顔である。

「いや、彼のいうことはもっともですよ、麻生元総理」

保守系知識人の元外交官崎岡久彦が言った。

「私も至って賛成ですな」

同じく保守系知識人の智上大学名誉教授部渡昇一深く頷いている。

「両先生、支持ありがとうございます！　我々真の日本人は、麻生太一郎を許さないぞー！　即刻母田神閣下更迭、靖国不参拝を謝罪しろー！　麻生は国民に土下座しろー！」

井桜は二人の支持を受けて、ますます勢いづいた。

「おい谷垣、あのデブを何とかしろよ。うるさくてしょうがないぜ」

河村が瀬羽に文句を言ってきた。

「余に言われてもな。直接本人に言えばよかろう」

「でもなあ。マイクで怒鳴られるのが落ちだぜ」

「いや、案外話せばわかる人間かもしれないのである。試してみる価値はあるな、ゼロ」

近藤が微笑を浮かべて言った。

「春雄さん、本気で言ってないだろ？　顔が笑ってるぜ」

「ばれたか」

「お前ほんとにゼロかよ。ゼロのコスプレしてるくらいなんだから、あんなでぶっちょ怖くねえだろ？　静かにしろって言ってこいよ」

関根が河村を小突いている。

「何小突いてんだ、この中途半端小太り男が！　どうせ太るなら、俺のように豪快に太れ！」

河村が関根を怒鳴りつけた。

「何わけわかんねえこと言ってんだよ。とっとと言ってこいっての」

「そうですよお。ひょっとして、河村さんて、あの眼鏡デブにびびってんじゃないですかあ」

箕輪が河村をからかった。

「馬鹿言え！　俺はゼロだ！　怖いものなんてねえ！」

「へー。じゃあ、早く言ってきてくださいよお」

箕輪も意地悪な笑顔を浮かべている。

「うむ。ゼロ、男を見せろなのである」

近藤が顎をしゃくった。その先には、井桜がいた。

「わかったよ！　行けばいいんだろ、行けば！」

河村は井桜に早足で近づいていく。

「どうなるかな？」

近藤が一同に聞いた。

「そうだなあ。マイクで怒鳴られて終わりじゃないか？」

元ニートの魔人、スキンヘッドの岩崎文太がまっ先に返答した。

「余も岩崎説に一票」

「私もでーす」

「俺も」

「実は春雄もそれを思っていたのである」

ニート一同が岩崎説に傾く中、ひとり異を唱えた男がいた。

「いや、それはいかにも安易に過ぎるでしょう」

手にエアガンをもった男であった。

「お、お前は、仙石首相暗殺未遂犯、山田正義！？」

近藤が泡を吹いている。

「彼なら、あの腰に帯びた剣で、井桜を打ちのめすでしょう」

山田は自信たっぷりと予言した。

第六章　愛国戦士、憂国戦士

「シンジ、久しぶりだな。元気だったかい？」

前アメリカ合衆国大統領、ジョージ・Ｗ・ブッシュが安倍に話しかけた。

「ええ、おかげさまで、ジョージ」

二人は熱く抱擁した。

「もちろん、この中での最重要ＶＩＰはこの私だよね、シンジ？」

ブッシュが意味ありげに安倍を見つめた。

「無論です、ジョージ」

「はははははは、それはいい。実にいい」

ブッシュは大笑した。

「なぜブッシュのような大量殺戮者が最重要人物になるのか？　私には理解できない」

バラク・オバマアメリカ合衆国大統領が不快気に顔を歪ませていた。

「いたのか、バラク。君は大統領に再選されるのかどうかを悩んでいればいいのだよ。私は再選はないと予想しているがね。アメリカ

国民はチェンジをチェンジするのさ。君はもう用済みだ。国民はオバマ人気という幻想を見るのをもうやめようとしているのた。賢明な選択だと私は思うね」

ブッシュが歯を見せて笑った。

「そうかな。私はまだ再選の希望を捨ててはいない」

「まあ、私も可能性がゼロとは言わんよ。それより、どうして私は人気投票で一票も入らなかったんだろう？　シンジ、わかるか？」

「かくいう私も一票も入っていないのですよ」

安倍が苦笑いした。

「俺も一票も入ってないぜ」

麻生が割ってはいってきた。

「それを言うなら、私もだ」

森も麻生に続き、割り込んできた。

「あなたたちとは違うはずの私も、一票すら入ってません。これはおかしい」

福田が不思議そうな顔をした。

「まあ皆さんは国民の支持が低かった方ですからしょうがないとしても、この私が一票もないのはいかにも納得がいきませんね」

小泉が微笑を浮かべながら言った。

「いや小泉さん、あんたも在職中ほどの人気はもう今はねえよ」

麻生がこいつは何を言っているのかといわんばかりに発言した。

河村は井桜のそばにやってきた。しかし、なかなか話しかけられなかった。井桜はまだ麻生に向けて抗議の演説を続けていたが、麻生さえまともに聞いておらず、元首相どもと話し込んでいる。

「・・・・・・というわけで、母田神論文は極めて正当な論理と歴史的事実によって成り立っており、その内容は愛国的なものという一語に尽きます。しかるに、麻生政権は何を思ったか、マスコミから批判されると、支持率低下につながることを恐れ、あろうことか、愛国者・憂国の士の鏡である母田神閣下を更迭してしまった。これはまさに、亡国の挙と言わざるを得ません。であるからして、麻生元首相は直ちにこの過ちを認め、母田神閣下と国民に謝罪するべきなのです」

演説もひと段落がついただろうと、河村は井桜に話しかけた。

「おいちょっとおっさん」

「は？　なんですかあなたは？」

井桜がマイクで河村に返答した。

「あんたさっきから、マイクで喋っててうるさくてしょうがないんだよ。静かにしてくんないか？」

河村のその言葉を聞いたとたん、井桜は激高した。

「貴様！　この愛国戦士、憂国戦士であるこの私の演説を妨害するのか！　お前は何者だ！　朝鮮人か！　シナ人か！　反日極左か！　このゴキブリめ！　さっさと失せろ！」

「どうやら岩崎説が正しかったようだな」

遠くから河村と井桜のやりとりを眺めていた瀬羽が言った。

「いや、まだわからない」

山田が微笑をたたえて言う。

「ほう。まだわからんとな。どうやら自信があるようだな、暗殺未遂犯よ」

瀬羽が山田の顔を注視した。

「ゼロはいわれなき中傷に黙っている男ではないはずですからね。仮にもゼロのコスプレをしているのなら、そうあるべきです」

「なかなか、言いよるな、このテロリスト」

瀬羽が感嘆した。

「ああ。まあでも、テロリストでは俺の方が数段凶悪だけどな」

岩崎が山田を意識して言った。

「お前はあまりに人を殺めすぎたな」

瀬羽が渋い顔をした。

「お前が書いたんだろ」

岩崎が即座に言い返す。

「そうだ。しかし、昨今の日本の政治情勢を見る限り、主民党のモデルである民主党ももう先が見えてきた。日本国民はこの政党に政権は任せられないと判断したようだ」

「何が言いたい？」

岩崎が瀬羽に問いかけた。

「大量殺人テロは論外としても、民主党は駄目だったということだ。余はそのことを一月末の時点で気が付いていたということだな」

「ほんとかよ」

岩崎が失笑した。

第七章　井桜劇場

河村は井桜の突然の激高に困惑した。

「ちょっと待ってくれよ、俺は朝鮮人でもシナ人でも反日極左でもないよ。俺はただ、あんたに静かにして欲しいだけなんだ」

「何を！　貴様は、私の全身からかもし出されるこのオーラがわからんのか！」

口角泡飛ばし、井桜が訴える。

「オーラ？」

河村はとんと理解できない。

「まあ、貴様のよな愛国心や憂国の志がない人間には、見えないだろうがな！　私は愛国戦士・憂国戦士特有のオーラを発しているはずなのだ！　平和ボケした貴様にはわかるまいな！」

「だからさあ、そのマイクで話すのやめにしてくれよ。うるさくてかなわねえだ」

「うるさいだと！？　この私の愛国心、憂国の志に満ちた愛国演説・憂国演説がうるさいと！？　貴様、本気で言っているのか！　この朝鮮人め！　このシナ人め！　この反日極左め！　このゴキブリめ！」

「だから俺は違うって」

河村はますます困惑するばかりであった。

「お前は、ゼロではないか」

「本当にゃ。ゼロにゃ」

「まさかまた相まみえるは。あのときの戦いを思い出しますね」

いつの間にか、河村に三人の男たちが近づいていた。警察官僚、東京都青少年治安対策本部長の田倉潤、刑法学者の田前雅英、自称教育家の塚戸宏である。

「げ！　お前らは！」

河村は三人とはかつて東京都庁で戦ったことがあった。

「ここで会ったが百年目とは、まさにこのこと。河村、ここで再戦といくかな？」

田倉が怒りに燃えた目で河村を睨んだ。

「なんですか、あなたたちは！　その朝鮮人・シナ人・反日極左・ゴキブリは今、私と話しているんですよ。突然やってきて、邪魔をしないで頂きたい」

井桜が息巻いた。

「あなたは確か、『在特会』の井桜会長でしたな。ご高名はかねがね。私は、田倉潤と申します。東京都青少年治安対策本部長を務めております」

田倉がご丁寧に井桜に名刺を差し出す。しかし、井桜は受け取らなかった。

「どうされました、井桜さん？」

田倉がキツネにつままれたような顔をしている。

「お、お前かあの悪名高い田倉潤だと！？」

井桜は田倉の名刺を手で払った。名刺が飛ばされていく。

「私はな、漫画規制には反対だったんだ！　児童ポルノ法改正にも反対だ！　よくよく顔を見てみれば、そこにいるのは田前に塚戸じゃないか。いずれも漫画規制・児童ポルノ法改正推進派じゃないか！　よくもまあ、悪人どもが雁首を揃えたもんだなあ！　私の愛国演説・憂国演説を聞きに来たのか！　そうか！　それなら、耳にたこができるほど、聞かせてやる！」

「なんか違う方向へ行ってしまったようなのである」

近藤が心配そうな顔をした。

「ああ。これでは、井桜劇場になってしまうな」

瀬羽も心配な表情を浮かべている。

「谷垣、なんとかするのである。このままでは、主役のはずの春雄やお前、ゼロが井桜に食われてしまうのである」

「確かに。何か手を打たんとならんだろう」

瀬羽はあごに手を当て、思案顔になった。

「なら、俺が行く。あの愛国戦士・憂国戦士を俺がぶっ倒してきてやるよ」

岩崎が腰を浮かせる。

「岩崎さん、手柄を独り占めされるおつもりですか？」

やんわりとだが、山田が岩崎の行動を制止した。

「じゃあお前も来るといい」

岩崎は歩き出した。その後ろ姿を、山田が追う。

「なんか面白そうなんで、私も行ってきまーす」

箕輪も席を立った。

「谷垣、我々はここで見ているだけでいいのか？」

近藤が瀬羽に問いかける。

「うーむ。余は仮にも作者・創造主だからな。軽々しいことはできんな」

「春雄も行くのである」

近藤が腰を浮かせかけた。

「待て、近藤。お前は野次馬のような真似をするのか？」

「う！　それを言われると・・・・・・」

近藤は再び席に着いた。

「我々は仮にも、この物語の主人公なのだ。河村はああいう軽いキャラだからいいが、我々二人はそういうキャラ設定ではないはずだ。それを忘れたか？」

「忘れたわけではないのである」

「ならば、あくまでその設定を死守しなければなるまい。そうだろう」

「うむ。春雄の腹は決まったのである」

近藤は瀬羽とともに、円卓から井桜たちの騒動を見物することにした。

第八章　話が進まない

「原野。原野はおらんか。原野伸介はいないか」

瀬羽が手を叩き、事務員の原野伸介を呼んだ。

「なんですか。なんか用事ですか。どうせまたろくてもないことなんでしょうけど」

原野が嫌々ながら人込みをかき分けてやってきた。

「おお、原野。お前の意見が聞きたい」

「なんですか？」

「どうしてこのブログは小説を書いているのに、アクセスが減っていくのだ？」

「ちょっと待ってくださいよ。そういう話なら、他の記事でしましょうよ。ここは小説書く記事でしょ？」

「しかし、これは緊急の話題だぞ？」

「・・・・・・簡単じゃないですか」

「なに、簡単だと？　それはどういうことだ？」

「だって、そもそもキャラ人気投票が有効投票がたった三票しかなかったわけで、あなたが書くキャラは人気がないんですよ。それな

のに、不人気のキャラが総登場する小説なんかいくら書いても、誰も読まないと思いますよ」

「おお、そういうことだったのか。・・・・・・もう下がっていいぞ」

「あんた何様ですか」

「余は世界ニート帝国皇帝だ」

「自分で勝手に名乗ってるだけでしょ」

「いいから下がりおろう」

「はいはい。自分勝手な自己中ですね、ほんと」

原野は渋々下がっていった。

「ということなのだが、近藤よ、どうしたものかな？」

瀬羽は近藤に目を向けた。

「春雄に言われても」

「余たちは読者に人気ないらしいぞ」

「というよりも、あらすじとこの展開が一致していないのである。いつになったら戦いが始まるのか、そして春雄たちは逃亡者になるのか。いつまでたってもくだくだだらだらと続いているだけなのである」

「それもそうだな。というか、未だにキャラ総登場してないし」

「それはまずいのである」

「やはりまずいか。しかし、思ったのだが、キャラ総登場させていたら、いくら頁あっても足らないと最近余は気がついた」

「おいおい、なのである」

「おお、河村じゃないか。久し振り」

漫画家枢やなが河村に声をかけた。枢と河村はかつて敵同士として戦ったこともあり、力を合わせて共闘関係にあったこともある。

「やなか。いいところに来てくれた、今大変なんだよ」

「どうした?」

「愛国戦士・憂国戦士とやらが、マイクで騒いでいるから、静かにさせようとしたんだが、うまくいかないんだ」

「ほう。それはそれは」

「河村君、調子はどう?」

声優福山潤が陽気に話しかけてきた。福山の近くには、かつて河

村と関係があった声優たちが控えていた。梶裕貴、東地宏樹、加藤英美里、藤村俊二、安元洋貴、立花慎之介、遊佐浩二、矢作紗友里、諏訪部順一、矢島晶子、日野聡、小野大輔、坂本真綾、櫻井孝宏、沢城みゆき、田村ゆかりである。みな、テレビアニメ「黒執事」の出演者ばかりであった。黒執事第一期の制作スタッフである、篠原俊哉、岡田麿里、植田益朗、勝股英夫、熊剛、岩田幹宏、清水博之、丸山博雄もいた。

「福山さんか。まあ、調子はいいぜ」

「ゼロさん、またふとったんじゃないですか」

小野がからかった。

「そうだな。また貫禄が増した気がする」

坂本が河村の突き出た腹を見ながら言う。

「お、お前は河村英樹ではないか！？」

眼鏡をかけた中年男が驚愕の大声を発した。ＴＢＳの名物企画者、竹田青滋である。竹田はかつて河村と戦い、倒された経験を持つ。

「にっくき怨敵河村英樹！」

竹田がわなわなと手を震えさせている。

「そんなに怒んなよ、オッサン」

河村は苦笑した。

「おい、デブゼロ」

河村の肩を叩いた男がいた。河村同様、テレビアニメ「コードギアス　反逆のルルーシュ」のゼロのコスプレをした男だった。

「やせゼロか！　おひさ！　元気だったか！」

「ああ。やっと出番が出てきて、ほっとしてるよ。読者はおろか、作者にもすっかり忘れられている感があったからな」

「河村さーん、何やせゼロさんと話し込んでんですか。とっととデブ眼鏡を静かにさせてくださいよ。あいつまだ漫画規制派相手に怒鳴りまくってますよ」

箕輪が河村をせかす。

「河村、俺の加勢は必要か？」

岩崎がにやにやしながら言った。

「いや、要らん。俺ひとりで十分だ」

河村はそう言うと、井桜のマイクを取り上げた。

第九章　まだまだキャラ総登場できない

「貴様、何をする！？　マイクを返せ！」

マイクを取られた井桜が暴れ出す。

「お前がうるさいからだろ」

河村は渡さない。

「はっはっはっはっはっ。馬鹿めが！　誰がマイクをひとつしか持っていないと言った？　マイクなら、まだまだあるわ！」

井桜が背広の内ポケットから新しいマイクを取り出した。

「な！　お前、何個マイク持ってんだよ！」

「マイクは私の命だからな。こういうこともあろうかと、万事抜かりなく、ということだ。さて、演説を再開するか」

井桜がマイクのスイッチを入れる。

「あーあー、マイクのテスト中、マイクのテスト中。うん、異常はないな」

「させるか！」

河村が井桜に躍りかかった。

「な、何をする！　私は男に抱きつかれて喜ぶ趣味はないぞ！　は、離れろ！」

二人は激しくもみ合った。

「お前は岩崎文太ではないか」

白衣を着た中年男が岩崎の眼前に立っていた。遺伝子工学博士の田中俊介である。隣には、大学教授の岡本裕一郎がいた。

「よう、田中に岡本か。ご無沙汰だったな」

「岩崎、お前には何票入ったんだ？」

岩崎の問いを無視して、田中が問うた。

「俺か？　ゼロだよ」

「ふん。やはりな。いかに民主党が不人気で、明らかに民主党をモデルとした主民党の政治家どもを殺しまくったお前とて、零票か。無理もないな。テロリストに投票する酔狂はあまりいないだろう。しかしだ！」

「うん？」

岩崎が不思議顔をした。

「なぜ、なぜこの天才科学者たる私に一票も入らないのか！　私には理解できん！　なぜだ！　なぜなんだ！」

「俺が知るかよ」

岩崎はせせら笑った。

「おいおいおい、誰かと思えば、昔俺を殺ろうとした奴じゃねえの？」

河村と井桜の取っ組み合いを見物していた関根に、見るからにガラの悪そうな男たちが近付いてきた。

「お、お前は！　あのときの！」

関根の顔がみるみる青ざめていく。民自党総裁谷垣の闇部隊たちであった。リーダーは佐藤清で、谷垣直人の監視役でもあった。佐藤はスキンヘッドのテツヤに、角刈りのツヨシ、鼻と耳にピアスをしているテルヒコ、眉毛を剃っているマコト、リーゼントのタカシに、パンチパーマのリョウタを引き連れていた。関根は佐藤とは昔、因縁があった。

「こいつが清さんを殺そうとした野郎ですか？」

テツヤが佐藤に確かめる。

「ああ、間違いねえ。俺を殺しに、公園の便所まで俺の尻追っかけ

てきやがったんだ。忌々しいぜ」

「俺らが兄貴と慕っている清さんの命を狙うなんて、許せねえ。袋叩きにしてやろうか、デブ？」

テツヤが関根の顔面すれすれに顔を近づけて聞いてきた。

「お、お、お、おち、落ちつけよ、お前ら」

関根はやっとの思いでそう言ったが、何の効果もなかった。関根はあっという間に佐藤たちに取り囲まれた。

「おい、誰か！　助けてくれ！　谷垣！　なんとかしてくれ！」

関根が瀬羽に助けを求め、視線を送る。しかし、瀬羽は何の行動も起こさなかった。

「岩崎、答えろ！　なぜ私は零票なんだ！」

田中が岩崎の胸倉をつかみ、問いただす。

「だから知らないって」

岩崎は苦笑いを浮かべるばかりだ。

「お前らが零票なんか、俺の知ったことか！」

突如として、男が絶叫した。

「あなたは押尾学！」

男は元俳優の押尾学であった。

「あほんとだ、お塩先生だ」

箕輪があっけにとられている。

「俺はなあ、ちゃんと俺に投票してくれた人がいたんだよ！　それなのに、アメブロのシステムが悪いせいで、反映されなかったんだよ！　どうなってんだ、ちくしょう！」

押尾の顔が悔しさで歪む。

「私だって一票もなかったよ！」

布団叩きを手にした初老の女が押尾に呼応するように叫んだ。奈良の引っ越しおばさんこと、河原美代子であった。

「それを言うなら、私もなかったなあ。読者は何を考えているのやら」

元ライブドア社長、ホリエモンこと堀江貴文が怪訝な表情をしている。

「私も一票もなかったぞ」

田代まさしも割って入ってきた。

「僕もだ！　なぜ若き天才小説家であるこの僕が、こんな恥辱を受けねばならないのか！」

丸坊主の小説家、滝本竜彦が絶叫する。

「そういえば、一度主役やったはずの僕も、票なかったですね」

法学生にして剣士の木杉勉が考え込んだ。

「おうおうおう、なんかおかしくねえか？」

特攻服を着たリーゼント頭が鉄パイプで床を叩く。

「なんで俺らには一票もなくて、あいつら三人だけちゃっかり一票ずつもらってんだ。おかしい。何かがおかしい。なんかむかつく」

リーゼントは誰に言うでもなく呟いたが、その周囲にいる者すべてに確かに聞こえていた。

第十章　キャラが被っている

「近藤よ、関根が佐藤の一団に包囲されたぞ」

瀬羽が近藤に言った。にやついた顔であった。

「うむ。あの男は自分のことをセッキーなどと称して、いささか調子に乗っていたのである。その罰が下されたのである」

「余も同感だな」

「はりつめた弓の　ふるえる弦よ」

突如として、黄色の髪の男があらわれ、歌を歌い始めた。

「お前は、輪美明宏」

男は霊能力者・超能力者の輪美明宏であった。本人は豊臣秀頼の生まれ変わりを自称していた。

「いかにも。余が輪美明宏である」

「余に何用か？」

瀬羽が訊ねた。

「わからぬか、瀬羽大輔」

「陛下と敬称をつけんか、この無礼者め」

「誰が貴様如きニートに陛下などとと敬称をつけるものか。よいか、余は貴様が余という一人称を使っていることが気に入らんのだ！」

「それはなにゆえだ？　別にいいではないか」

「余と貴様は、一人称が同じという点で、キャラが被ってしまっているのだ！　即刻、一人称を変更せよ！」

「断る。余は作者にして創造主。余という一人称を使って、何が悪い？　キャラが被るのが嫌だと言うなら、お前が一人称を変えれば言いだけの話だ。容易ではないか」

「貴様！」

「老師、この男は口で言ってもわからぬようですよ」

和服姿の男が言った。スピリチャルカウンセラーの原江啓之であった。この男も、真田幸村の生まれ変わりを自称していた。

「上様、この思い上がった男の始末はわれらにお任せあれ！」

輪美の背後に控えた赤装束の男たちが一斉に言った。自称真田十勇士の生まれ変わりたちである。頭の上にわっかがついている。

「相わかった。そちたちに任せる。瀬羽大輔を討ち取るのだ」

「ははっ！」

真田十勇士たちが同時に腰に帯びた刀を抜刀する。

「かかれ！」

輪美の一声で、十勇士が瀬羽に襲いかかった。

「あちらこちらで小競り合いが勃発しているようですぜ、サタン様」

黒服の男が意地の悪そうな笑みを浮かべて言った。悪魔にして、魔界の副王ルシファーである。

「そのようだな。人間どもが争うのは、いつ見ても楽しいものだ」

サタンが応じる。サタンとルシファーの傍には、シュトリ、ゼパス、フラウロス、スカルミリオーネといった悪魔たちが傅いていた。

「天使どもの動きはどうだ？」

サタンが質問した。

「これといった動きはないようですぜ、サタン様。俺らもそろそろ動きだすころ合いかと思いますぜ」

「ルシファーよ、どうやらお前の最近の口癖は、語尾に『ぜ』をつけることらしいな」

「ええ、そうらしいですぜ」

「あまり無理がある使い方はしないようにな」

「へへー。ラジャー」

天使ミカエル、ガブリエル、ラファエルの三名はまっ白い空間の一角に陣取り、騒ぎの動向を窺っていた。全員白い服装をしている。白のスーツに、白のネクタイである。

「なぜまた争いが起こってしまったのか。これもまた、悪魔どもの仕業なのか？」

ガブリエルが口火を切った。

「わかるはずもない」

ミカエルが吐き捨てる。

「このままただ座して待っているわけにもいかないだろう」

ラファエルが告げた。

「では聞くが、具体的に何をどうすると言うのだ？」

ガブリエルが険しい表情でラファエルに訊く。

「暴れている人間どもを説得してまわるのだ。それしかあるまい」

「愚かな。無駄骨に終わるのが関の山だろう」

ミカエルが吐き捨てるように言った。

「ミカエル、さっきからの口調は何なのだ？　人間を見捨てるのか？」

ガブリエルが不審げな顔をしている。

「まったくだ。ミカエルよ、あなたはまた再転向でもするつもりなのか？　天使から悪魔への転向でも考えているのか？」

ラファエルが単刀直入に問うた。

「馬鹿な。そうではない。そうではないが、私はそろそろ人間どもの相も変わらずの愚かしさに、飽き飽きしていたところなのだ」

ミカエルが眉間に皺をよせて言った。

第十一章　井桜撃破

「とおう！」

真田十勇士のひとり、霧隠才蔵が瀬羽に斬りつけた。

「なに！？」

信じられぬ事態が生じた。なんと、霧隠の攻撃は瀬羽の体をすりつけてしまったのだ。

「どういうことだ、これは！？」

霧隠が驚愕している。

「知れたこと、幽霊に過ぎぬお前らには、余を傷つけることは叶わぬということだな」

瀬羽が大いに嘲笑した。

「おのれ！　ならば、この私の出番！」

原江が素早く着物を脱ぎ捨て、ボクサーパンツ一丁となった。筋肉隆々とした肉体を晒してやまない。

「原江神拳を受けてみよ！」

原江が地を蹴って飛翔した。

「だからマイクよこせって言ってるだろ！」
「嫌だ！　マイクは私の命！　誰が渡すものか！」
河村と井桜はまだ二人でもみ合っていた。
「いつ！」
河村の尻に激痛が走った。
「久しぶりじゃないか、河村」
声優沢城が両手にエアガンを手に立っていた。
「お前の仕業か、沢城！」
「ああ、そうだよ。お前には恨みがあるからね」
河村と沢城は以前にバトルを交えた経緯があり、沢城は河村に倒されたのだった。
「今俺はこのでぶっちょと戦ってんだよ、邪魔しないでくれ」
「誰がでぶっちょだ！　お前もよく太っているじゃないか！　人のこと言えるのか！」
井桜が反論する。

「うるせえ！　お前の体重言ってみろよ！　そうすれば、どっちが重いかがわかるだろ」

「嫌だ！　誰が教えるものか！」

「おいデブども、あたしの話を聞けよ」

沢城がもったエアガンから弾丸が発射され、その二発は正確に河村と井桜の尻にヒットした。

「いでで！」

「いった！　何で私まで！　巻き添え？　これって巻き添え？」

井桜は納得がいかない様子だった。

「デブがごちゃごちゃうるさいんだよ。天下の沢城みゆき様が喋ってんだから、おとなしく黙って聞いてろよ。じゃないと、また撃つよ？　何発でも撃つよ？」

沢城は残酷そうな笑みを浮かべていた。

「お前、さてはサドだな」

河村が顔を顰めて言った。

「そうかもね。はい、また悪口言ったんで、一発と」

またしても河村の尻を弾丸が直撃する。

「いで！　なにすんだよ、このゴリラ！」

「また言った。はい、一発」

「いで！　馬鹿、やめろって！」

「だってあたし、お前のこと嫌いだもん。天才声優なめんなよ？」

「わけわかんねえよ！」

「つうかさあ、なんでお前に一票入って、あたしに一票もないわけ？　つうか、真面目な話、あたしなら、千票でも一万票でも入ってもおかしくないよね？　それなのに、零票ってどういうこと？　河村、説明してみ？」

「俺が知るかよ」

「はいまた逆らった」

沢城は無情にも引き金を引く。

「いでで！　もう尻はやめろよ！　俺の尻、はれ上がってんじゃねえの！」

「お前の尻のことなんか、どうだっていいよ。つうか、お前の生死自体、とうでもいいよ。というか、お前うざいから、もう殺すし」

「殺すだと？　正気か？　人気投票で俺に負けたくらいで、俺を殺すってのか？」

「ああ、そうだよ。敗北なんて、あたしのプライドが許さないね」
「ま、まさか、あの沢城ゆきがこんなキャラだったとは」
井桜が絶句している。
「うるせえよ、眼鏡デブ」
沢城のエアガンの銃口が井桜に向く。
「ひいっ！　わ、私は真に日本を憂うる愛国戦士・憂国戦士の井桜真だぞ！　それを知っての蛮行か！」
「悪いオッサン、あたし、あんたのこと知らんわ。はい、死んで」
沢城の二丁エアガンから弾丸が発射された。弾丸は井桜の喉、胸、腹に食い込んだ。
「ごぼっ！　ば、ばかな。この私が、こんなところで・・・・・・」
井桜は前のめりに崩れ落ちた。
「はい、自称愛国戦士・憂国戦士の眼鏡デブ一匹駆除完了と。さあて、次はお前だ、河村」
沢城のエアガンが河村を捉えた。
「まじか！？」

河村は素っ頓狂な声を発した。

「恨むなら、あたしに数百万票入れなかった愚民どもを恨め。はい、さいなら」

沢城は引き金を引いた。

第十二章　井桜再起動

「二〇一〇年十二月、異空間において三名の男が話し合っていた。近藤春雄、河村英樹、瀬羽大輔の三名である。彼らは先日行われたキャラ人気投票でそれぞれ一票をもらった兵たちであった。しかし、そこに多数の闖入者たちが現れた。キャラ人気投票で一票も入らなかったその他大勢のキャラクターたちである。その中のひとり、井桜誠がマイクで自称愛国演説・憂国演説を始めたことから、河村が動き出す。河村は井桜の騒音演説を止めようとしたのだった。だが、簡単に耳を貸す井桜ではなかった。もみ合う二人。そんなとき、二人を見物していた関根哲夫はかつてトラブルがあった佐藤清たちと再会し、取り囲まれてしまう。瀬羽に助けを求める関根だったが、哀れ無視される羽目に。・・・・・・もみ合っていた河村と井桜の前に、ひとりの天才声優が現れた。その名は沢城みゆき。かつて河村と一戦交えた日本一の天才声優である。沢城によって、あっけなく愛国戦士・憂国戦士の井桜は倒された。その銃口は今、河村に向けられていた。河村の運命やいかに」

「解説御苦労、近藤。それは楽しいのか」

瀬羽が近藤に訊ねた。

「うむ。春雄はごくまれに無性に物事を解説してみたい衝動に駆られることがあるのである。今がちょうどそのときであったのである。ところで、谷垣、お前は春雄に話しかけている場合なのか？」

「おお、そうであったな」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

原江が雄たけびをあげながら、瀬羽に渾身の拳や蹴りを放っていた。しかし、それはいずれも命中しなかった。瀬羽が攻撃を見切り、すべて回避していたからである。

「なぜだ！　なぜ私の攻撃が当たらない！　貴様、いったい何者だ！」

原江は全身汗まみれになっていた。

「余か？　だから申しているであろう？　余は世界ニート帝国皇帝瀬羽大輔と」

「そういうことを言っているのではない！　貴様はどうみても、人間じゃない！　何者なんだ！」

「そうだな。強いて言えば、神、創造主と言ったところか。所詮余が書いている物語の中で、余が作り出したキャラクターにすぎないお前たちが、余に勝てるはずもないのだ。諦めて、なんとかの泉とかいう番組にでも出ていることだな」

瀬羽が冷笑を浮かべ、言い放った。

「くそ！」

「原江、何をやっておる！　早々にそやつを討ち取るのだ！　余の命が聞けんのか！」

輪美がいら立っている。

「輪美、この光景が見えぬのか？　お前の配下は余に手出しできんのだ。まったくな。お前の眼は節穴か？」

「おのれ！　ならば余自ら、貴様を成敗してくれるわ！」

輪美が腰の刀を抜き放つ。

「やめておけ。お前たちに余は倒せぬ」

「黙れ下郎！　おおおおおおおおおおおおおおおお！」

輪美が刀を大きく振りかぶり、瀬羽の首筋目掛けて振り下ろす。瀬羽は刀が当たる瞬間にその場を移動していた。

「！　小癪な！」

輪美は刀を振りまくった。しかし、どれも無駄なあがきにすぎなかった。瀬羽の肌に刀を触れることは叶わなかった。

「おのれ！　尋常に勝負せよ、瀬羽！」

「お断りだ」

瀬羽はまだ冷笑を浮かべていた。

「むう。ならば、お前！　瀬羽の隣に座っているお前！　お前を倒してくれる！」

「え？　なぜ春雄に？」

「黙れ！　余は今機嫌が悪いのだ！」

輪美は近藤に斬りかかった。

「おい、しっかりしろ」

誰かが自分の頬を叩いている。私は・・・・・・。そうだ、私は沢城みゆきに撃たれたのだった。あの小娘め。声優だと思って油断した。まさか真の愛国戦士・憂国戦士・愛国者・憂国の士であるこの私を本当に撃つとは。あの女は、朝鮮人かシナ人か帰化人か反日極左か何かに違いない。きっとそうだ。そうでなければ、あんな蛮行はできないはずだ。私にこんな目を遭わせるなんて、許せん。断じて許せん。あの女には天誅を下さねば。

私は私の頬を叩いている者を見た。

「お、お前は！？」

私は言葉を失った。なにしろ、そこには居るはずのない人間が立っていたのだから。

「俺のことを知ってるらしいな」

その男、岩崎文太が言った。生きているとは知らなかった。岩崎は今年の一月末の事件で自殺したと報道されていたからだ。

私はしばらく呆然と岩崎の顔を眺めていた。

「そんなにじろじろ見るなよ。それよりあんた、このままでいいのか？」

「というと？」

「あの沢城って女にいいようにやられたままでいいのかって聞いてるんだよ」

いいわけがない。あの小娘め。愛国戦士・憂国戦士・愛国者・憂国の士をなめている。なめくさっている。許せん。私はふつふつと怒りが湧いてくるのを感じた。

その怒りが表情に現れたのだろう、岩崎が私の顔を見て笑った。

「そうだ。怒って当然だ。さあ、あの女を倒してこいよ」

岩崎が私を抱き起した。ずきりと痛みが走った。まだ体が痛むようだ。

「さあ行け、愛国戦士・憂国戦士の井桜先生」

私は岩崎に言われるまま、沢城の方角に向ってダッシュした。

第十三章　竹P、井桜倒れる

「河村、最後に言い残すことはないか？」

沢城が河村に銃口を向けたまま、訊ねた。

「遺言なんか誰が言うかよ。俺はまだ死ぬつもりはねえ」

そう言うや否や、河村は腰に差した剣を抜き、身構えた。

「元気がいいなあ、河村。だが、お前は死ぬよ。日本一の天才声優沢城みゆき様のご機嫌を損ねるから、こんなことになるんだ。すべてはお前が蒔いた種だよ」

「ちょっと待ったあ！」

突如として、男が二人の間に割って入った。竹田であった。

「竹P、何の真似だよ？」

沢城が青筋を立てて怒り、竹田を睨みつけている。

「沢城さん、河村は私の獲物なんだ！　この男には、あなた同様、私も恨みがある！　だから、殺すのなら、私がその恨みを晴らしてから殺して欲しい」

「ハンッ。知らないよ、そんなこと。名企画者だか何だか知らないけど、調子こいてんじゃねえよ、オッサン。邪魔だからそこどいてくれる？　さもないと、オッサンごと撃つよ？　オッサン諸共撃つ

よ？　あたしは全然躊躇わないからね。天才声優なめんなよ、こら」
沢城が盛んに竹田にそこをどくように顎でしゃくった。
「さ、沢城、この竹Ｐを愚弄するとは、許し難い！　少しばかり人気があるからとって、調子に乗りおって！　もう許さん！　この竹Ｐが成敗してくれる！　お前のような糞生意気な小娘が生き残れる業界ではないということを、この竹Ｐが教えてやる！」
そう叫ぶや、竹田は沢城に向かって突進した。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
「馬鹿か、お前」
沢城があきれはてた顔で引き金を引く。弾丸が竹田の両足の脛に命中した。
「うあ！」
竹田がずっこけた。
「き、貴様！」
沢城は竹田の額に狙いを定めた。
「はいはい、お疲れ山でした、竹Ｐ。はい、おやすみなさーい」
的を外さず、竹田の額に弾丸が食い込んだ。竹田は気絶した。

「さて、お邪魔虫も消えたことだし、河村、やっとお前を始末できるな」

沢城が河村に向きなおった。しかし、先ほどいた場所に河村の姿はなかった。

「河村！　どこいきやがった！」

沢城は辺りを見渡した。

「沢城ー！」

突如として、沢城の名を呼ぶ者が現れた。井桜であった。

「なんだよ、またお前かよ。こっちはお前の相手なんかしてる暇はないんだよ」

沢城が面倒くさそうな顔をした。

「沢城みゆき！　よくもこの愛国戦士・憂国戦士・愛国者・憂国の士であるこの私を撃ったな！　許せん！　許せんぞ！　お前が朝鮮人か、シナ人か、帰化人か、反日極左か何かであることは既に露見した！　お前の正体が反日分子であるとわかった以上、私は見逃すことはできん！　全力で叩き潰してやる！　おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

井桜が沢城に向かって駆け寄ってきた。

「さっきの竹Pと同じじゃねえか。馬鹿かお前らは」

沢城は顔をゆがめながら、引き金を引く。

「ごおっ！」

井桜が転倒した。両膝に弾丸が直撃したのだ。

「お、おのれ、沢城！　私にこんなことをして、ただですむと思うなよ！　私のバックには日本が、日本国民が控えているんだぞ！　それをわかってやっているのか、沢城！」

「知らねえよ。お前いったい何様だよ。お前のバックに日本や日本国民がついてるわけないだろ。全部お前の思い込みだよ。あきれ果てるよ、ほんと」

沢城が井桜に歩み寄り、井桜の額に銃口を押しあてた。

「バイバイ、愛国戦士。あの世でも戦隊ごっこやってな」

「馬鹿にしおってからに！　お前にはきっと神罰が下るぞ！」

井桜が吼えた。

「ああもうなんでもいいよ、じゃあな」

沢城がエアガンの引き金を引いた。井桜の額に弾丸が食い込んだ。井桜は昏倒した。

「ところで河村よ、なぜお前は余の背中に隠れているのだ？」
瀬羽が自分の背中に潜んでいる河村に問うた。
「わかるだろ。沢城に狙われてんだよ」
「ならば、その剣で倒せばよかろう」
「あれがないだろ、あれが」
「あれとは？」
「ラジカセだよ、ラジカセ。お前も鈍いな」
「ラジカセがないと戦えないのか？」
「当たり前だろ。俺はいつもバトルのときはラジカセ持参でやって勝ってたんだから、あれがないと戦えないんだよ」
「ほう。そうか」
「そうかじゃねえよ。早いとこ、ラジカセ出せや」
「出せないこともないが、余に何か見返りはあるのか？」
「そんなもん、あるわけねえだろ」
「なら、この話はなかったことになるな」
「ケチ臭いこと言うなよ。出せって」

「断る」

「出せよ」

「断る」

「出せってば出せよ」

「断る」

二人の無意味な応酬はしばらく続いた。

第十四章　兆候

「余の剣を受けてみよ、下郎！」

輪美の刀が振り下ろされた。近藤の首は切り落とされるはずであった。

「なに！」

輪美は目を剥いた。近藤が真剣白刃取りを行っていたからである。

「ふっ。春雄をなめてもらっては困るのである。この春雄、相撲だけでなく、日本の伝統的な武術にも精通しているのである。言うなれば、春雄は日本武術のスペシャリストなのである」

「ば、馬鹿な！　余の剣を素手で受け止めただと！　貴様、何者だ！」

「だから今、日本武術のスペシャリストだと説明したところなのである。人の話を聞けなのである」

近藤はやれやれと大きくため息を漏らした。

「く！　下郎、刀を離せ！　ええい！　離さぬか！」

「離せば、また春雄に斬りかかってくるのは、火を見るより明らか、春雄はそこまで馬鹿ではないのである」

「おのれ！　上様を愚弄するか！」

原江が飛んだ。近藤にとび蹴りを食らわそうとする。

「見切ったのである！」

春雄は数歩体を後退させた。近藤がいた地点に原江が着地する。

「私の攻撃をよけただと！」

原江が驚いている。

「早くラジカセ出せって」

「出さないともう何度言ったことか。何度言われても答えは同じだ。出さない者は出さん。以上だ」

河村と瀬羽はまだ押し問答を繰り広げていた。

「河村！　河村はどこだ！」

沢城が辺りを探し回っていた。瀬羽の近くにまで寄ってくる。

「やべ！　沢城だ！　おい谷垣、お前俺のこと喋るんじゃねえぞ、わかったな」

「どういたそうか。話してしまおうか」

「おいおい、それはないだろ。俺たちは同じく人気投票で一票もらった仲間だろ。同志じゃないのか」

「そうだったかな。余とお前たちは仲間だったことなど、はたしてあったのか。これは少し、検討する余地があるな」

「なんでもいいから、教えるんじゃねえぞ」

沢城が瀬羽の近くまでやってきた。

「おいお前、河村英樹を知らないか？」

「河村？　どんな男だ？」

「コードギアスのゼロのコスプレしてるでぶっちょだよ。こんなに腹が出てる」

沢城が腹が突き出ていることをジェスチャーで伝えた。

「ああ、あいつか、あいつなら、私の後ろに隠れているぞ」

「なんだと！」

沢城が血相を変え、瀬羽の背後に回る。

「河村、こんなところにいたのか」

「てめえ、何喋ってんだよ」

河村が瀬羽に抗議した。

「河村、死ね」

沢城が迷わず引き金を引く。

「やべ！」

河村はたまらず走った。弾丸は河村から離れ、瀬羽の背中に命中した。

「あうち！　何をするかこのゴリラ！　余を誰だと思っている？　世界ニート帝国瀬羽大輔だぞ？」

「ああ、なんかわけのわからん兄ちゃんだろ？　名前と顔くらいは知ってるけど、あんた何様？　つうかさ、お前偉いの？」

「偉いに決まっている。なにしろ、皇帝だからな。しかも、お前よりは人気がある。余は一票もらっていたのだからな」

それを聞いて、沢城の目の色が変わった。

「なんだって！　お前も一票もらっていたのか！　ふざけんなよ！　どいつもこいつも、この日本一の天才声優沢城みゆき様を差し置いて、生意気なんだよ！　お前も抹殺だ！」

沢城が続けざまに引き金を引く。しかし、どの弾も瀬羽に命中しなかった。瀬羽が魔力を使い、弾丸を止めてしまったからだ。

「こうなると、人間に過ぎんお前は手も足も出せんな」

瀬羽が微笑んだ。

「ちくしょう！　ざけんな！　このあたしを馬鹿にすると、ファンが黙ってねえぞ、こら！」

沢城が悔しそうに歯を食いしばって吼え、地団太踏んだ。

「お前2ちゃんねるでアンチスレ立ってるくらいだからな、そんなに人気があるかどうかは疑わしい」

「ちっくしょう！」

「なになに、キャラ人気投票で一票もらった奴が集まってるって」

特攻服を着たリーゼントが瀬羽たちに近づいてきた。

「私たちには一票もなかったというのに、妬ましい！　きいー！」

引っ越しおばさんが悔しがる。

「俺だって本当なら一票もらっていたはすなんだ！　それなのに！　くそっ！」

押尾も負けじと悔しがった。

「私にも一票よこせ！」

田代がシュプレヒコールをあげ、拳を振り上げた。

「私も一票欲しいな。一票よこせ！」

堀江も拳を振り上げる。

リーゼントたちにつられたように、続々と近藤、河村、瀬羽の周辺に人垣ができ始めていた。

第十五章　瀬羽無敵伝説

「おいみんな、キャラ人気投票で一票もらった三人が集まってるって」

映画俳優のティム・ロビンスが俳優仲間に告げた。

「なんですって？　私は一票もなかったのに、もらった人間がいるなんて」

スカーレット・ヨハンソンが悔しそうな顔をした。

「その三人っていったい何者なんだ？」

ジョージ・クルーニーが怪訝な表情でティムに訊ねた。

「さあ。僕もよく知らないけど、なんでも三人ともニートらしいよ」

「ニート？　ニートってなんだ？」

ジョージはますますわけがらからない。

「働きもせず、学校にも行っていない若者のことらしい。イギリスや日本では社会問題化しているそうだね」

ティムが説明する。

「なんと！　働かず、学校にも行っていない、そんな人間にこの私が敗れたというのか！　信じられん！」

ジョージは天を仰いだ。

「そんな奴ら、ただのただ飯食いじゃねえか。なんでそいつらに一票入るんだ？」

ダニー・グローヴァーは理解できないらしかった。

「僕に聞かれてもね」

「ちっくっしょう！　日本語版ウィキペディアでは好き勝手に馬鹿にされるし、人気投票では〇票だし、どうなってんだ！　なめやがって！　シット！」

アレック・ボールドウィンが両手をわなわなと震わせて怒った。

「人権派の私に票が入らないということは、投票者がみんな保守系だったのかもしれないわね」

スーザン・サランドンが思案顔で言った。

「俺は何度も地球と人類を救ってきたというのに、なんで一票もねえんだ？　どうなってる？　何が起こってるんだ？」

ブルース・ウィリスが頭を抱えていた。

「まったくだ、俺だって何度も悪党を倒してきたのに。なんで一票もない？」

スティーヴン・セガールが不満満々で言った。

「責任者、出てこい！」

滝本が大声で怒鳴った。

「それはみのもんたの台詞だろう？」

瀬羽が静かに滝本を見つめた。

「お前が責任者か？」

滝本が瀬羽に詰め寄った。

「まあな。余は世界ニート帝国皇帝瀬羽大輔だ。頭が高い。控えおろう」

「馬鹿な！　何が皇帝だ！　それなら、僕は天才小説家滝本竜彦だ！　僕の天才的頭脳に比べれば、ニート皇帝など、屁でもないね！　笑わせるなよ！」

滝本が大笑いした。

「貴様、余を愚弄したな？　天才小説家だか何だか知らんが、ハゲに馬鹿にされたかと思うと、腹が立つ。鬘くらいつけたらどうだ？　それも身だしなみというものだろう？」

「誰がハゲだ！　僕はハゲじゃない、丸坊主だ！」

滝本が猛然と反論する。

「じゃあ何か、お前はネオナチか何かなのか？　日本のネオナチか？」

「そんなわないだろ！　どういう発想だよ！」

滝本は瀬羽の言葉に呆れた。

「まあなんにせよ、余を愚弄した罪は重い。償ってもらわねばな」

「僕をどうすると？」

滝本は余裕の笑みを浮かべていた。

「こうするのだ」

瀬羽が右手を突き出した。すると、突風が巻き起こり、滝本を襲った。

「うあっ！」

滝本の体は数メートル宙を浮きいたかと思うと、突如風がやみ、床に叩きつけられた。滝本は気を失った。

「余に逆らう者は、みなこうなる。余に逆らうはこれすなわち反逆の罪。極刑に値しよう」

「なんて男だ！　暴力反対！」

ティムが瀬羽の行いに抗議した。

「お前も飛びたい口か？　なら、望みどおりにしてやろう」

ティムの体も空を舞い、床に叩きつけられた。ティムは失神した。

「どうだ？　これでもまだ余に逆らうか？　余に反したいと思う者あれば、前へ進み出よ。余が葬り去ってやろう」

ブルースとスティーヴンが一歩前へ出た。

「何が皇帝だ。ちゃんちゃらやおかしいぜ。誰がお前なんぞに従うもんかよ。これでも食らえ」

ブルースが二丁拳銃の引き金を引く。しかし、弾丸は瀬羽に到達する前に止まってしまった。

「ちっ。銃は使えないか」

ブルースが舌打ちした。

「ならば、俺の出番だな」

スティーヴンが瀬羽に急接近した。素早く拳を叩きこむ。

「効かん。効かんな。おい中年、今何か余にしたか？」

瀬羽が眉毛を釣りふげて嘲笑した。

第十六章　逃亡者

「俺の拳が効かないだと！？　シット！　どうなってるんだ！」

セガールは信じられないと言った表情を見せた。

「常人に余を傷つけることはできぬ。諦めて帰ることだな」

瀬羽はせせら笑った。

「こんな鼻たれ小僧に馬鹿にされたまま、おめおめと帰れるか。・・・・・そうだ！　他にキャラ人気投票で一票もらったのが二人いるはずだな。そいつらは誰だ！」

「それならば、春雄のことである」

近藤がセガールに手を挙げて見せた。

「お前が！　あとひとりは！」

「あ、俺だけど」

河村も渋々と挙手する。

「おいみんな、こうなったら、このくそがき皇帝の代わりに、この肥満体二人を倒すしかないな。な、そうだろ？」

セガールがその場にいる全員に提案した。

「賛成！　私は大賛成だよ！」

引っ越しおばさんが盛んに布団叩きをふって賛意を示した。

「私も異議なしだ」

堀江も賛同した。

「賛成」

「同意」

「オーケイ」

次々と賛同意見が続出、反対者は誰もいなかった。

「え、ちょ、お前ら。なんだよこの展開は」

河村はびびっている。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

特攻服のリーゼントが河村に鉄パイプで殴りかかった。

「うわっ！」

河村は剣でなんとか受け止めた。

「な、何すんだ、あんた！」

「この俺様を差し置いてちゃっかり一票もらってるのが気に食わねえ。だからお前には消えてもらう。そしてお前の一票は、俺が頂くのさ」

「どういうルールだよ」

「お、そのルールいいんじゃね？」

突然、ルシファーが口を挟んできた。いつの間に来たのか、河村たちの近くまで接近していた。

「みんな、聞いてちょ。近藤と河村を倒した者には、その票が獲得できるらしいぜ。ここだけの話だが。ほげーとしていていいのか、みんな。早くしないと、票がなくなっちゃうぜ」

ルシファーが意地悪げに笑った。

「それは本当か！」

「その票、俺にくれ！」

近藤と河村はあっという間に取り囲まれた。

「なんだお前らは！　来んな！　来んなよ！」

河村は牽制の意味を込めて剣を振り回す。

「谷垣、さすがにこの数は春雄も厳しいのである。なんとかしろなのである」

日本武術のスペシャリストであるはずの近藤の顔に、冷や汗が浮かんでいた。

「なんとかできないこともないが、それには条件がある」

「なんだ？」

「助ける代わりに、余の臣下になってもらう」

「なんだと！？　そんな条件、のめるかなのである！」

近藤が瀬羽を睨みつけた。

「そうか。ならば、やむをえまい。余は高いところから見物させてもらう」

瀬羽は空を飛んだ。数メートル上空から地上の騒動を見物する。

「これぞまさに、高みの見物。気持ちがいい。実に愉快だ」

「票をよこせえええええええええええ！」

引っ越しおばさんが布団叩きで近藤に襲いかかる。近藤は掌でがっちりと掴んだ。

「隙あり！」

近藤の右側からは輪美が、左側からは原江が、背後からは堀江が襲いかかってきた。

さすがの近藤もこれには参った。

「四店同時攻撃とは、卑怯千番なのである！　うーむ！　もはやこれまでか！　谷垣、一時的ではあるが、春雄はお前の臣下になるのである！　だから、春雄を助けてくれなのである！」

近藤はほとんど絶叫していた。

「河村はどうする？」

瀬羽は余裕の笑みを浮かべ、河村に訊ねた。

「ちい！　しょうがねえ！　俺も一時的だが、お前の臣下になってやるよ！　なりゃいいんだろ、なりゃ！」

「よい返事だ。賢明な選択をしたな」

瀬羽が右手の親指を鳴らした。すると、一瞬で近藤、河村、瀬羽の姿が消えた。

「どこいきやがった！」

襲撃者たちは辺り一面を見渡したが、どこにも三人の姿はなかった。

第十七章　臣下

「ここはどこだ！？」

河村は叫び声をあげた。そこは、さっきと同様、真っ白い空間であった。しかし、河村に襲いかかってきた連中はいない場所であった。

「先程とは異なる空間へ移動したのだ。余の力でな」

瀬羽が解説した。

「うむ。これならば、ひとまず安心なのである。感謝するのである、谷垣」

近藤が瀬羽に一礼した。

「ああ、あんがとな、谷垣」

河村も近藤にならい、頭を下げた。

「貴様ら、少々言葉使いを間違えているのではないか」

瀬羽が不機嫌そうに言った。

「というと？」

近藤がぽかんとした顔をした。

「どうやらもう忘れてしまっているようだが、貴様らは余の臣下になるとさっき約束したばかりだろう。臣下ならば、臣下らしい言葉使いというものがあろう」

「ああ、そうだったたっけか」

「うむ。確かに約束はしたのである。がしかし・・・・・・」

近藤が言葉を詰まらせた。

「しかし?」

瀬羽が続きを促した。

「あれは、緊急事態だったから、いたしかたなく、無理やり約束させられたようなものなのである。従って、約束は無効なのである」

近藤が胸を張った。

「そうだそうだ、あんな約束、無効だ無効」

河村も近藤に同調した。

「貴様ら・・・・・・。まさに、喉元過ぎれば熱さ忘れる、そのものではないか・・・・・・。余を愚弄しおって」

瀬羽が二人を鋭い目つきで睨みつけた。

「そんなふうに睨まれても、無効なもんは無効だぜ、谷垣。あ、今は世界ニート帝国皇帝瀬羽大輔だっけ?　まあ、どっちでもいいや」

「何が皇帝だ、なのである。いくら家来がひとりもいないからといって、人を無理やり家来にするのは、おかしいのである。谷垣、お前は間違っているのである！」

「あ、春雄さん、『間違っているぞ！』は俺の台詞、人の台詞勝手にとんなよ」

「おお、そうだったのである。すまない、ゼロ」

「わかってくれればそれでいいのさ」

近藤と河村は二人で笑い合った。

「近藤、河村、余の臣下にならぬというのなら、先程の場所に貴様ら二人を置いてくることもできるが、どうする？」

「おいおいおい！　それは困るぜ！　そんなことされたら、俺ら嫉妬に狂った連中に半殺しか殺されるに決まってんじゃん！　勘弁してくれよ！」

河村が懇願した。

「春雄も同感なのである！　頼む、この通りなのである！」

近藤が先程とは打って変わり、低姿勢となった。その場に土下座して、瀬羽に頼み込んだ。

「お、俺も頼む！　それだけは！　それだけはやめてくれ！」

河村も瀬羽に土下座した。

「ならば、余の臣下になるのだな？」

「なる！　もうなるよ！　なってやるよ！　それでいんだろ！」

半ばやけくそ気味に河村が叫んだ。

「なるのである！」

近藤も絶叫した。

「よかろう。今日から貴様らは余の臣下だ」

瀬羽は満足そうに何度も頷いた。

「あいつらどこ行ったんだよ」

「私が知るか」

「どうなってんだよ」

近藤、河村、瀬羽の三名が消えてからというもの、三人がもといた空間は喧噪のただ中にあった。

「ふっ。うろたえるだけの愚か者どもめ。だが、余は一味違うのだ。余には力がある」

輪美は不敵な笑みを浮かべていた。

「確かに。上様のお力なら、奴らの居場所を確かめることができるでしょう」

「無論じゃ。では、さっそく」

「その話、聞かせてもらいましたよ」

「な、何者じゃ！」

輪美が珍しくうろたえ、声の主を見た。がりがりにやせた若い女だった。まだ二十代だと思われた。

「超美人こと、箕輪晴子でーす。よろしくお願いしまーす」

箕輪がぺこりと頭を下げた。

「その箕輪とやらが、余に何の用じゃ」

輪美が訊ねた。明らかに警戒していた。

「私に作戦があるんですよ」

「作戦じゃと？　ほほう、面白い、申してみよ」

輪美の顔がやや和らいだ。

「ええっとですねえ」

箕輪が作戦を語り始めた。

第十八章　歓迎式

河村は瀬羽の肩を揉み、近藤は瀬羽の足の裏をマッサージしていた。

「ううむ。いい気持ちだ。余は大変気持ちいいぞ。河村、そこはもっと力を強くするのだ」

瀬羽が河村に指示を飛ばした。

「へいへい、皇帝陛下、了解です」

河村はあまり気乗りしない返事を寄越した。

「なんでこの春雄ともあろう者が、こんなことを・・・・・・」

近藤の顔は暗かった。

「なんだ近藤、不満か？　不満なら、もといた場所に今すぐ飛ばしてやるぞ？」

「め、めっそうもないのである！」

「そうか、ならばよいが。近藤、お前ももっと力を込めて強く揉め。たるんどるぞ」

「ははー、陛下」

「みっなっさーん、お元気ですかー」

間の抜けた声が突如、瀬羽主従の耳に轟いた。

「お前は、超美人、じゃなかった、ガリガリ骨女、箕輪晴子。余に何用だ？」

瀬羽が鋭い眼光で箕輪を睨みつけた。

「そんなに睨まないでくださいよ。私ってそんなに美人ですか？やだ、照れちゃう」

箕輪が顔を赤くした。

「お前が美人だとするならは、この世界が恐ろしことになってしまう。余は断じて否定する」

「もう、ガッキージュニアは意地悪なんだから」

箕輪が頬を膨らませた。

「箕輪君、どうしてここが？　そして、何をしにここにやってきたのであるか？」

近藤が手を休めて、箕輪に聞いた。

「ああ、これは輪美さんに手伝ってもらいました。あの人、超能力者なんで。ここに来たのは、もちろん、先輩達を連れ戻すために来たんですよ」

「なんだと！？　あんなところに連れ戻されたら、春雄たちがどうなるか、わかっているではないか！　君はちゃんと意味が分かって

いるのか、箕輪君！」

「さっきのは本当すみませんでした、私が皆さんを説得したんですよ。皆さん、先輩達に襲いかかったことはほんとに反省してます。ものすごく反省してます。今は、先輩達に謝りたい、そして先輩達が獲得した一票を祝いたいと、そう言っていますよ」

「余は騙されんぞ。これは罠だ」

「今、先輩達を歓迎する式典を開いているところなんです。先輩達がないと、始まらないんです。ですから、お願いです、来てください」

箕輪が深く頭を下げた。

「けっ、頼まれたって誰が行くかよ。俺たちはそこまで阿呆じゃないぜ」

河村が吐き捨てるように言った。

「まったくなのである！　春雄たちをなめるななのである！　春雄とて、皇帝陛下同様、これが罠であることは勘づいているのである！」

「皇帝陛下？　ちょっと近藤先輩と河村さんどうしちゃったんですか？　まさか、谷垣の手下になっちゃったとか？」

箕輪は唖然とした。

「お、お前には関係ないことだぜ、箕輪さん」

「そ、そうなのである、箕輪君には関係ないのである」

河村と近藤は明らかにうろたえていた。

「信じてもらえませんか。それなら、谷垣さんの力で、歓迎式典の様子をここにモニターしてもらえませんか？」

箕輪が手を合わせて、瀬羽に願った。

「よかろう」

瀬羽の力で、巨大スクリーンが現れた。近藤達三名がいた場所が映し出された。

「じゃあ次は、私の声が向こうの皆さんに聞こえるようにしてもらえますか？」

「わかった」

「皆さーん、超美人です。説得したんですけど、近藤先輩達は歓迎式に出たくないそうです。なんだか、まだ信じてもらえないみたいで。そこで、皆さんにお願いです。先輩達に来てもらえるようなことを言ってもらえませんか？」

すると、歓迎式とやらにいた人間たちが一斉に拍手を始めた。

「おめでとう、近藤春雄さん」

「おめでとう、河村英樹さん」

「おめでとう、瀬羽大輔さん」

「我々は、心底あなたがたの一票を祝っています。先程は取り乱して、大変失礼致しました。ですが、今はもう落ち着きました。今は、ただただ、あなたがたの一票を祝うばかりです。もう倒そうなんて、露ほども思っておりません。ですから、安心してここに来てください」

「み、みんな・・・・・・」

河村はさっきとは打って変わり、感動しているようだった。

「う、うう、は、春雄は、誤解していたのである！　みんなの善意を疑うなんて、間違っていたのは、春雄の方なのである！」

近藤は感極まって泣き出した。

「おい貴様ら、簡単にだまされるな。これは奴らの姦計ぞ」

瀬羽が警告を発したが、近藤と河村の耳には入らなかった。

「さあさあ、お二人とも、自称皇帝なんて放置して、歓迎式に出ましょう」

二人は箕輪に誘われるままに、歩き出した。

第十九章　「エヴァンゲリオン最終回作戦」

近藤と河村は箕輪に案内され、光り輝く場所の近くまで来た。

「さあさあ、この中をくぐると、あちらに行けますよ。くぐっちゃってくださいな」

箕輪が促した。

「わかった」

「了解。歓迎式が楽しみなのである」

二人がくぐったのを確認した後で、箕輪も続いた。

「おお、来てくれたか、お二人。おや、瀬羽大輔さんはどうしたんだ？」

輪美が言った。

「いやあ、あの人は聞く耳持ってくれませんでした。説得失敗です」

箕輪が詫びた。

「そうか。ならばしかたあるまい。おめでとう、近藤さん、おめでとう、河村さん」

一斉におめでとうコールが始まった。

「みんな、ありがとう。こんなに祝ってもらえて、俺はほんと嬉しいよ」

「春雄も感謝感激なのである。みんな、ありがとう。感謝するのである」

「そうだ先輩と河村さん、胴上げやりませんか？」

「マジで？　いいの？」

「よいのか？」

二人は顔を見合わせた。

「いいに決まってるじゃないですか。これは二人を祝うための歓迎式なんですよ？　さあさあ、皆さん、お二人を胴上げしますよ」

近藤と河村は大勢の人間に取り囲まれ、胴上げされた。

「わっしょい、わっしょい」

「おめでとう」

「ありがとう」

近藤と河村はその人生の中で、これ以上ないほどの至福の時を過ごしていた。

「おめでとう。・・・・・・うっそでーす！　近藤、河村死ね！」

「なに！」

死ねという単語が二人の耳を捉えたとき、胴上げは終わり、二人は背中から床に叩きつけられた。

「死ね近藤！」

誰かが近藤の右足を蹴った。痛みが走る。

「河村死ね！」

河村も蹴られた。ひとりふたりの攻撃ではない。一斉に数十人から攻撃されていた。

「ど、どうして！？　みんな、我々二人を祝ってくれるはずではなかったのか！」

近藤が泡を食っていた。

「先輩、申し訳ないんですけど、さっきのは全部先輩たちをはめるためのお芝居です。かくいう私も一票も入らなくて、先輩達を憎んでいた口でしてね」

箕輪がにんまりと笑っていた。背筋も凍るような笑みだった。

「み、箕輪君、春雄たちを裏切ったのか！　春雄と箕輪君は児童ポルノ法や東京都条例でともに戦った同志ではないか！　それを忘れ

たのか！」

蹴られまくられながらも、近藤は箕輪に問うた。

「あのときは同志でしたけど、今は違うかなあって感じですかね。これ、名付けて「エヴァンゲリオン最終回作戦」って言うんですよ。私が名付け親です。・・・・・・というわけで、近藤死ね！」

箕輪も攻撃陣に加わり、近藤の顔をサッカーボールのように蹴りあげた。

「ぐはっ！」

「引っ越し！　引っ越し！　あんたたちは、あの世に引っ越しだ！」

引っ越しおばさんが叫んでいた。

「調子に乗るからだよ、河村。ざまあないな」

沢城がエアガンを撃ちながら、河村を蹴りあげた。

「原江神拳を食らえ！」

原江が休みなく次々と二人に拳を送った。

「この特殊警棒の味はどうかな、近藤、河村」

田倉が特殊警棒で二人を攻撃した。

「更生しなさい！」

塚戸が竹刀で二人を殴打した。

「おらあああああああああああああ！」

特攻服のリーゼントが鉄パイプを振り回した。

「ニートの分際で、この私に逆らうなど、生意気にゃあ！」

田前が猫を操り、二人をひっかかせた。

「おい皆の者、そろそろよいのではないか？」

輪美が声をかけた。

「そうですね。みなさーん、攻撃をやめてくださーい」

箕輪がその場にいるもの全員に声をかけた。

二人から人が離れていく。

近藤と河村は虫の息であった。半殺しとはこういうことを言うのだろう。まさに今の二人の状態は半殺しであった。

最終章　スーパー〇〇

俺は歓喜していた。なにしろ、アホな人間どもがキャラ人気投票などに憑かれて、暴力をふるいまくっていたのだから。暴力。憎悪。これほど俺ら悪魔を心躍らせるものはない。

そうだ。もっと殴れ。もっと蹴れ。近藤と河村が憎いだろう。その憎しみに従え。憎しみに身を委ねろ。自分の本能を解放しろ。本能のままに生きるんだ。それこそが人間らしさというものなのだと、俺は思う。

いいぞ。殺せ。殺すんだ。殴り殺せ。蹴り殺せ。そのときこそ、お前たち人間はつまらない理性やら愛やらから脱け出し、俺ら悪魔に近づくことができるのだ。

お？　もう殴りや蹴りはおしまいか？　ということは、近藤と河村は死んだのか？

・・・・・・まだ生きているじゃないか。何やってんだ、まったく。こういうときこそ、俺様の出番だな。

「おいみんな、近藤と河村はまだ完全に倒されていないぞ。これじゃあ、こいつらの票はゲットできないぜ」

ルシファーが全員に告げた。

「くそっ！　なら、私が止めを刺してやる！　こいつらの票は私のものだ！」

引っ越しおばさんが布団叩きで近藤の頭を叩く。叩きまくる。

「そんなんで死ぬかよ」

ルシファーは呆れ顔だった。

「そうはさせるものか！　票をいただくのは、この輪美ぞ！」

輪美が引っ越しおばさんに体当たりした。

「く！　この糞爺！　お前はもののけ姫でも見て、主題歌歌ってりゃいいんだよ！」

引っ越しおばさんと輪美が激しくもみ合った。

「とどめをさすのは俺だ！」

「いや、この私だ！」

「票は俺のもんだ！」

あちらこちらで票をめぐって戦いが展開された。

（ふふふ、いいぞ。アホども。殺し合え。争え。それこそが俺の力の源となるのだ）

ルシファーはルシファー・ノートを取り出し、素早く何やら書き

殴った。

「おいみんな、大変だ！　近藤と河村を見ろ！」

全員が小競り合いをいったん止め、二人を見つめた。

「はおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

二人は立ち上がっていた。それればかりでなく、二人の体は光り輝き、髪は逆立っていた。

「こ、これは！？　いったい何が起こっているのだ！？」

全員が瞠目した。

「春雄は、スーパー力士になったのである！」

「俺はもう河村英樹じゃねえ、スーパーゼロだ！」

「ば、ばかな、スーパー力士、スーパーゼロだと！？」

一同はどよめいた。

「まだまだ驚くのは早いぜ、みんな、他にも変化した奴がいるぜ！」

ルシファーがさらなる事態を告げた。

「おおおおおおおおおおおおおおお！　俺はスーパー華族人だ！」

麻生が叫びをあげた。これも光り輝き、髪が逆立っている。

「あああああああああああああああああ！　私はスーパーお坊ちゃまです！」

安倍が言った。安倍も変化を遂げていた。

「俺はスーパー老人だ！」

原石が発言した。光に包まれ、白髪が逆立っていた。

「私はスーパー愛国戦士、井桜誠だ！」

沢城に倒されたはずの井桜が絶叫していた。

「私はスーパー名企画者、竹Ｐだ！」

竹田も咆哮した。こちらもいつの間にか立ち上がっていた。

「あたしはスーパー天才声優、沢城みゆき様だ！　跪け、愚民ども！」

「僕はスーパー天才小説家、滝本竜彦だ！」

「俺はスーパー愛国テロリスト、岩崎文太だ！」

「スーパー法学生＆剣士、木杉勉です」

「スーパー超美人、箕輪晴子でーす。あ、スーパーと超って被ってますね、あははは」

「私はスーパー引っ越しおばさん、河原美代子だ！　スーパー引っ越し！　スーパー引っ越し！」

「私はスーパー前科者、田代まさしだ！　逮捕歴ならまだまだ増やせるぞ！」

「スーパー不人気政治家、森喜雄だ！」

「スーパー革命戦士、瀬猪直樹だ！」

「スーパー友愛宰相、山鳩由紀夫です！」

スーパー宣言は途絶えることなく続いた。

「なんだ！　何が起こった？　これはいったい！？」

瀬羽はただただ動転していた。

「春雄は！」

「俺は！」

近藤と河村が同時に口を開き、言葉を発した。

「誰にも票は渡さないのである！　この票は我々のものなのである！」

「誰にも票を渡さない！　この票は俺たちのもんだ！」

「文句があるなら、かかってこい！」

「文句があるなら、挑んでこいなのである！」

近藤と河村は取り囲む周囲の人間に戦いを挑んでいった。

「ルシファーよ、これは少し遊び過ぎではないのか」

サタンがルシファーに言った。

「見てくださいよ、サタン様！　人がごみのようですぜ！　ははははははははははははははは！」

ルシファーは抱腹絶倒していた。この状況に満足していたのだろう。

「さすがは副王陛下、やりますな」

悪魔の誰かが言った。

「全部読んだ？　感想、どう？」

谷垣直人が近藤春雄、河村英樹、箕輪晴子、関根哲夫、木杉勉、原野伸介を前にして訊ねた。

「お前これ、俺はどうなんだよ？　最後の方、出てきてないし、佐藤たちと会った後、どうなってんだよ」

関根が一気に捲くし立てた。

「ああ、お前のこと忘れてたわ。すまんセッキー」

谷垣が謝った。

「谷垣、お前は春雄やゼロに何か恨みでもあるのか？」

近藤が質問した。

「いや、別に」

「いやいや、絶対あるだろ。じゃなきゃ、ふるぼっこにするわけねえじゃん」

河村が不満げに漏らした。

「なんかこの小説の中の私、すっごい腹黒なんですけど。キャラ人

気投票如きで、先輩を裏切るわけないじゃないですか」

箕輪も不満そうだった。

「というか、僕、あまり出てきてないし、それも本当に申し訳程度にしか出てきてませんよね。どうなってんですか」

木杉も不平を漏らした。

「私もほとんど出てきてませんね。ほんと、どうなってんですか」

原野も文句があるようだった。

「なんかみんな不平不満だらけだな。俺はどう書けばよかったんだよ」

谷垣が本音をぶちまけた。

「うーん、強いて言うなら、こうなるくらいなら、書かなきゃよかったんじゃねえの？」

河村が思案顔で言った。

「それよりこの後はどうなるのだ？　なんか中途半端なところで終わっているが、まさかこれで終わりなのか？」

恐る恐る近藤が訊ねた。

「ああ、これね、もうなんか続き書くの面倒くさくなったから、これでおしまい。なんか文句ある？」

谷垣が開き直ったように言った。

「ええー！」

谷垣以外の全員が驚いた。

終

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4002p/

『キャラ人気投票戦争』

2011年10月6日16時30分発行